

# 講演

日時／平成26年9月17日（水）13：30～15：00  
会場／日本特殊陶業市民会館 フォレストホール

名古屋市内9法人会  
合同講演会

俳優

笹野高史氏



## 『待機晩成 ～日本一の脇役が語る人生の美学～』

造り酒屋  
“笹野のぼん”

お蔭様さまで最近忙しく、有り難いことでございます。若い頃は、いい仕事が来ないか、大きな役が来ないか、待っていました。60歳近くになって、いま仕事のピークでございます。若い頃忙しければ良かったのですが、年とってから忙しくなったので、体力的に追いつかず、あちこち傷だらけでございます。

私は来る仕事は断らないのが主義でございまして、どこへでも馳せ参じます。度々こちらにも寄せていただきますが、私は味噌煮込みうどんが大好物で、あちこち食べ歩き回りました。美味しいですね。1ヵ月食べ続けても飽きません。

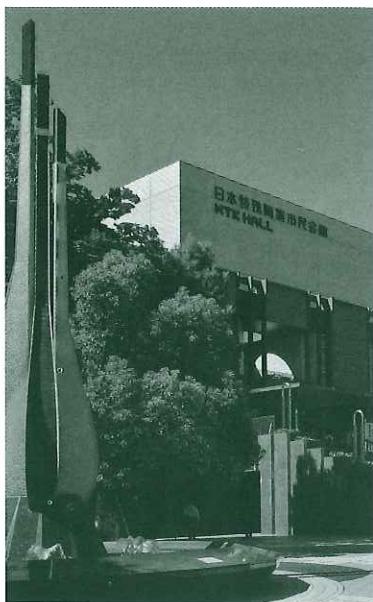
生まれは兵庫県淡路島です。江戸時代からの造り酒屋の男兄弟4人の末っ子です。私が産まれましたときは景気が良くて、“笹野のぼん”と言われて育ちました。

いま66歳です。私が年齢を言いますと「オオ～ッ！（見た目より若いじゃないか）」と声

があがります。私は高校時代からずっと年上に見られていまして、いまだに年上に見られて「歳のわりに元気だねえ」と言われます。

私が3歳のときに父親が結核で死にました。その後すぐに看病していた母も結核になり、1年ほど療養していました。その間、母の実家に預けられました。お祖母ちゃんは着物をキリッと着た人で、「私（祖母）が預かっている間にだらしない子どもにしたらいけないと厳しくしたのでしょうか。よく怒られて泣いていました。慰めてくれたのは母親の兄のお嫁さんでした。優しい伯母ちゃんで、母親のように慕っていました。

ある日、玄関先に母親のシルエット。「高ちゃん、お母さん迎えに来たよ」。知らないオバちゃんと行くのはイヤだと困らせたそうです。「では3人で帰ろう」と伯母ちゃんと母と3人で造り酒屋に帰りました。お菓子を食べて、ふと気が付くと伯母ちゃんがいない。「伯母ちゃん、待って！！僕も行く～」とバスを追っかけます。母親に引き





留められるのですが、ドラマのようなシーンでした。

#### 中学生のとき 映画俳優になると決心

母親は酒屋の女社長になるのはイヤだと、別に家を買い家族で暮らし始めましたが、小学5年生のとき母親も死んでしまいました。

小学5年生で両親がいなくなった私は、家庭の教育がなされていなくて、どこか欠陥があると思います。ですから未だにバカなことばかりやっているのでございます。

兄弟4人、造り酒屋の実家に戻りました。ある日、郵便局長をやっている叔父が怒鳴り込んできました。

「高史、こっちへ来い!! アホか、これは切手ではなくて収入印紙や。親がおらんということは、こういうことか、情けない！」。

切手の入った棚に似たようなものがあったので切手と思って収入印紙を貼って出したのです。

中学生になると、大人になつたらどんな職業に就くか話題に

なります。何になろうか模索しているとき、お母ちゃんとよく映画に行ったことを思い出しました。

悲しい映画を食い入るように真剣に観ていた母親のシルエットが思い浮かびます。母親が好きだった映画は面白かったです。スクリーンに写っているのは映画俳優、よし！俺は大きくなったら映画俳優になろうと志しました。

しかし家に帰りお風呂場の鏡を見ましたら、ニキビだらけでじゃがいもみたいな顔。週刊誌には二枚目ばかり紹介されています。俺みたいな奴は映画俳優にはなれそうもないナと挫けそうになりました。

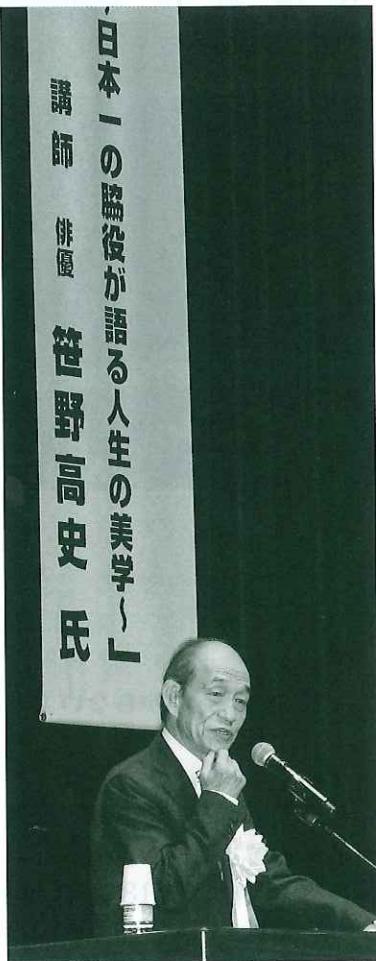
その頃、彗星のようにテレビに出てきた人気者が渥美清さんです。チリチリ頭に四角い顔、細い目。どんどん人気が出て主演もされるようになって、こういう人でも俳優という仕事ができるのなら、俺もいけると仄かな希望を持たせてくれたのです。

ある日、少年雑誌の巻末に通信販売の本『映画俳優になる方法』がありました。切手で代金を送りましたら小包が届きました。

た。家人には見つからないようにして部屋で開けましたら、書いてあるのは、アナウンサーや俳優になろうという方が訓練のために練習する早口言葉や外郎売りという歌舞伎18番の台詞でした。ガッカリして引き出しの奥に入れました。ある日、学校から帰りましたら兄から、その本を見せられ「これは何や。アホ！ボケ！カス！もっと真面なことを考えろ」と言われました。兄弟ですから言うことが残酷です。それからは映画俳優になると言うと人様に笑われるのだという知恵がつきました。映画俳優になりたい気持ちは種火のようにありましたがポッケに入れ、人には一切喋りませんでした。

#### 東京の大学に入学して 俳優の道まっしぐら

東京の大学に行けば俳優の勉強ができると思い、日本大学芸術学部映画学科に入学、大学の演劇サークルに入ったのが運の尽き、将来が決まったようなものです。



それからプロの劇団「自由劇場」に出入りするようになります。柄本明さん、佐藤B作さんは同じ年で一緒に芝居をしていましたが、早いうちに柄本さんもB作さんも劇団を辞めて、自分の劇団を立ち上げられました。

当時、渥美清さんの『男はつらいよ』シリーズは大人気で、その映画に出ることが俳優として一流である証しになっていました。劇団を出たB作さんがまず『男はつらいよ』に出たのです。悔しかったです。

次に柄本さん。でも彼らが出演したこと、「そうか、俺にもチャンスがくるかも知れない」と希望をもっていました。

私が在籍していた劇団でヒットした芝居が『上海バンスキング』です。『男はつらいよ』のプロデューサーさんが、その芝居に出ていた私を見て出演依頼してくださいました。

待ってました！しかし待てど暮らせど台本が届かない。痺れをきらして電話をしましたら、「もう少しお待ちください。監督は知らない俳優を使いたがらないのです」。

その頃、舞台『キスマーメイト』というミュージカルの仕事がきました。主演は倍賞千恵子さんです。

倍賞さんと言えば寅次郎の妹・さくらさん役。きっと山田洋次監督はこの舞台を観に来られるに違いない。僕のことを舞台で観てもらえたなら知らない俳優とは言わせないとthoughtいました。

役は殺し屋A。

1カ月練習、1カ月の舞台です。必然的に倍賞さんとも親しくなります。倍賞さんに「山田洋次監督は倍賞さんのリサイタルや舞台を観に来られますか」と聞いたら、一度も来たことはないと言われガッカリしましたが、楽しい舞台でした。

でもある日、突然山田洋次監督が観に来られたのです。それで『男はつらいよ』36作目の出演が決まりました。現場では渥美さん、関敬六さんが楽しそうにお話しをされています。夢のようでした。ですから倍賞さんには足を向けて寝られません。





---

### 「ワンシーン役者の 笹野でございます」

それから気に入っていただけのか山田監督に使っていただいている。ずっとワンシーンですが、いろいろな役をやらせていただきました。

撮影現場で渥美さんと楽しくお話しをしているとスタッフの方が呼びに来ます。「そろそろ出番です」。ワンシーンですから1時間ほどで終わります。渥美さんに「笹野もう終わりましたので、次の電車でもう帰ります」とご挨拶すると、「え、もう帰るの？いいねえ、笹野ちゃんみたいにスッと現場に来て、オイシイ場面をサッとやって帰っていく。俺もそうなりたかった」

帰りの電車の中で、なんで渥美さんはあんなことをおっしゃったのだろうと考えました。そうか！「たくさんの台詞をやりたいだろうけれど、我慢して、くさらないでやっていれば、きっといい芽が出るからね」という励ましの言葉だと気が付いて電車の中でさめざめと泣きました。それから、よし！

俺は、いろいろな役を喜々としてやるワンシーン役者になろうと、自ら「私ワンシーン役者の 笹野でございます」と言い触らしました。

俳優の報酬は「台本1本幾ら」です。大きい役がつきますと1週間とか10日、または1カ月かかったりしますが、私はワンシーン役者ですから撮影は1日で終わります。釣りバカ日誌でも2日ほどです。私は1カ月20本、30本やっていました。ワンシーン役者は楽しかったです。家内も、私が家に居る時間もあって喜んでいましたし、生活は成り立っていました。

渥美さんが亡くなつてから、山田監督は藤沢周平さんの時代劇3部作『たそがれ清兵衛』『隠し剣・鬼の爪』『武士の一分』をおつくりになりました。『武士の一分』の台本が届いたとき、最初から名前が出ていました。驚きました。チャンス到来！17歳年下の可愛い嫁に、「こんな大きな役が来たよ。頑張るぞ～」。撮影の初日から頑張りました。公開したら大入りで、映画は6つも賞をいただきました（第30回日本アカデミー賞）。

---

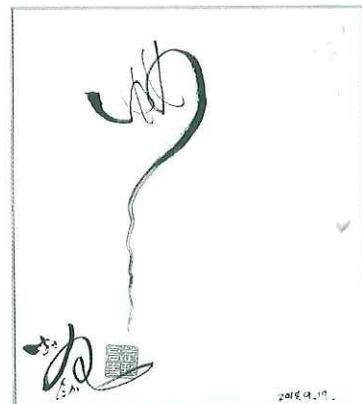
### もう少し 早く死んでください

ワンシーン役者と名乗っていましたが、「賞（最優秀助演男優賞）をおもらいになった笹野さんにこんな小さい役は申し訳ない」と役はどんどん大きくなります。そうすると出演本数が減ります。

大河ドラマ『天地人』で秀吉の役をいただきました。秀吉は私に似ている、秀吉の役は俺にしかできないと思っていましたので嬉しかったです。「半年は出演していただきます」と言われました。でも皆様ご存じのようにNHKの報酬はお安い！妻に頭を下げて、生活費を半分に切り詰めてもらいました。

勉強して秀吉役に挑みましたが、最初は信長（吉川晃司さん）より老けているのはおかしいと評判が悪かったです。信長の死後だんだん良くなりまして、「あと1カ月長生きしてもらうことになりました」。いやいや、早く死なしてください（笑）。





秀吉の臨終の場面は嬉しゅうございました。秀吉の奥方役は憧れの“緋牡丹お竜”富司純子さん。側室の淀君役は深田恭子さん。足元では石田三成役の小栗旬さん。豪華キャスティングに見守られて死のうとしているのです。嬉しくて、なかなか死ないので、監督に「もう少し早く死んでください」。もったいなくて、そんな早く死ねない、そんな思い出があります。

役が大きくなりますのは役者として嬉しいことです。『おりびと』は第81回アカデミー賞外国語映画賞をいただきました。夢にまで見た本場アメリカのオスカー賞を持って写した写真は宝物になっています。

昨日『ふしぎな岬の物語』のプレミア試写会に出て、ご挨拶させてもらいました。温かい気持ちになるいい映画です。モントリオール世界映画祭ではダブル受賞(審査員特別賞グランプリ・エキュメニカル審査員賞)いたしました。

私が主演していますマイナーな映画『グレイトフルデッド』は東京一館のみの上映です。少し怖い映画です。

### カッコ良かった “日本の宝”渥美清さん

渥美清さん、山田洋次さん、中村勘三郎さん、津川雅彦さん、いろいろな方に聴く機会をしていただきました。僕ひとりではこんなところまで来られなかつたと思います。

渥美清さんはカッコいいです。『男はつらいよ』が縁で柄本ちゃんと私の3人で、よく食事に行きました。それは私の自慢のひとつです。

外国のお芝居やサーカス、新宿のオカマショーも観に行つたことがあります。帰りには3人で食事をするのですが、浅草の昔の話を聞いたり、若い頃の話を聞いたり、あの通りの話術の方で面白かったです。もちろん渥美清さんが御馳走してくれるのですが、渥美清さんが財布を出して払っているのを見たことがありません。僕たちが、気が付かない間に、支払いは済ませていらっしゃる。「では今日はこれでお開きにしましょう」と言うとスッとレジの前を通って帰られる。見事でした。「渥美さん、いまタクシー止めますから」「いいの、いいの、

じゃあね」と、僕たちに気を遣わせないように、“日本の宝”である渥美さんは人込みのなかにスッと消えていくのです。本当にカッコ良かったです。

年をとるのも悪くないです。面白いです。いろいろな経験ができます。規則正しく良い人間として、若者に範を垂れるような年寄りになります。皆様もお元気でお過ごしください。

※この記事は平成26年9月17日(水)  
の講演を要約したものです。

文責 (一社)名古屋西法人会